

長編推理小説

傷だらけの孤独

笹沢左保

■読者のみなさんへ

《芸文新書》はあらゆる人びとに憩いをもたらす茶の間の図書館です。日暮しの糧として、生きて行く知恵や明日への明るい希望をお贈りしたいと願っております。

この本に対するご感想やご意見、アイデアをお聞かせください。つねに読者とともに歩む本——これが私たちの編集モットーです。

芸文新書・編集部

傷だらけの孤独

芸文新書

1965年1月10日 1刷発行

著者 笹 沢 左 保

発行者 井 上 正 也

印刷所 暁印刷株式会社

発行所／株式会社 芸文社

東京都千代田区神田駿河台3丁目5番地三五ビル

電話・東京(201) 0133—5 振替・東京 9359

傷だらけの 孤独

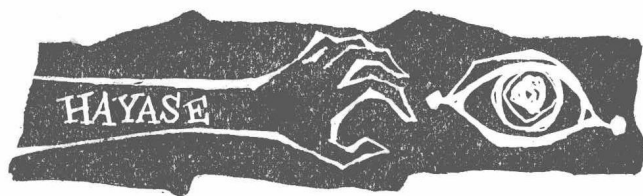


笹沢左保

傷だらけの孤独 目次

プロローグ	五
求婚者	三
降りかかる火の粉	三
第一の死	五
不運な再会	七
寝返りを打つ	九
ベッドでの陰謀	八
攻勢	九
第二の死	一〇
意外な告白	一六
刺す	一八
受刑	一四〇
黄色い粉	一五九
乗込み	一七九
罨と死と	一九九
古い汚点	二二九
死と空しさと	二三八

装幀・中村 宏
挿画・土居 淳男



プロローグ

*

早瀬弥一という男

早瀬弥一は、昭和三十九年二月十六日で、三十三歳になる。未歳だった。身長は一メートル六十五で、あまり背の高い方ではない。体重も五十七キロだからさしていい体格だとはいえなかった。

しかし、外見は決して痩せて見えなかった。筋肉質のせいなのだろう。胸は厚いし、肩巾もある。特に、右腕が太く、その筋肉は石のように固かった。

弥一は、美男子ではなかった。だが、醜男でもない。色は青白く、目がポツカリと凹こんでいた。鼻が大きくて、それがいかにも彼を精力的であるふうに見せていた。唇の色が悪くて、常にかさかさ乾いていた。げっそりと肉が落ちた右の頬に、長さ五センチ余りの傷がある。

特に陰気ではなかったが、弥一の眼差しはどちらかといえば暗い方だっ

た。そして左の目は少しも動かない。左の目は、義眼なのである。

どうして左の目が義眼なのか、それについては、ちょっとしたエピソードがある。終戦直後、彼がまだ旧制中学の三年生の時だった。彼はある日、数人の不良学生たちにとり囲まれた。場所は、横浜駅の北口であった。

今はもうデパートが建ち、立派な駅前になっているが、当時は茫漠と焼野原が広がっているだけで、建物一つない荒れ果てたところだった。

終戦後は、中学生たちが、急速に不良化して行つた。殆んどの連中が煙草を吸った。アメリカ兵が日の丸の旗や絹の帯などと交換した煙草が、大量に巷へ流れ出たからである。

それでこの頃の不良学生たちが、おとなしそうな中学生をつかまえて喧嘩を売ってくる目的といえば、煙草をたかることにあったのだ。さて、連中の顔を見わたして、弥一はまず何人いるか人数を確かめた。相手は全部で、五人いた。

「モク（煙草）を持っているか？」

この連中の番長格であるらしい中学生がいった。

「持っていない」

弥一は答えた。事実、持っていないなかったのである。彼は今でも、煙草を吸わないのだから、まだ中学生だった時分に持っているはずはなかった。しかし、相手は本気にしなかった。それは、弥一の服装がきちんとしていたし、一見して金持の坊ちゃんふうに見えたからだろう。

その時分の不良中学生たちの服装といえば、必ずず一定していた。鞆は布地で、普通なら肩か

ら斜めにかけているのである。だが彼らの場合は鞆の帯の部分に極端に長くして、それを片方の肩だけにかけているのだった。中には鞆を地上すれすれにまで下げて歩いているのもいた。

ペテンと称した学生帽は、出来るだけぺちゃんこにつぶして、常にそれで靴を磨いたりしてテカテカに光らせている。学校の徽章は、マッチの火で焙ってキラキラ光らないように工夫する。こうした学生帽はたいへんに貴重がられて、卒業して行く際に、気に入った下級生に譲りわたしたりしたものだ。

「いい度胸だな」

相手は凄味を利かせて笑った。

「持っていないものは仕方がないだろう」

ムツとしながら弥一はいった。

「これだけ、人数がいるんだ。ヤキを入れられたらどうなるか、分かってるだろう。怖くないのか」

「怖くない」

「よし、少し可愛がってやろう」

「待て。どうしたら、ぼくを見逃してくれるんだ」

「おとなしく、モクを出せばいいんだよ」

「持っていないんだ」

「じゃあ、片目でもつぶしてみせるんだな」

「よし……」

弥一は靴から切出しナイフを取り出すと、いきなり自分の左目に突き立てたのだった。左目を押えた手の指の間から血が流れ出るのを見て、死人のような顔色になったのは五人の不良学生たちだった。彼らは、一言も言わずに逃げて行ってしまった。ただ一人だけ、番長格の学生が残ったのはさすがだった。この学生は、岩起昌也といって、このことがあって以来心から弥一に心服してしまったのである。

二十七歳の秋に死を迎えるまで、岩起昌也は弥一と交友を絶たなかったのだった。

弥一が左目を失った経緯^{いきさつ}は、こういうことであつた。なぜ、そんな無謀なことをしたのかと訊くと、弥一は今でも分からないと答える。多分、夢中だったのだろうと笑っているだけで、多くを言わない。

しかし、ぼくの推測では、こういう行動をとらずにいらなかった理由があつたのだと思う。当時の弥一は、横浜市の港北区に住んでいた。東横線の白楽駅で降りて、十分ほど歩いた住宅地に彼の家はあつた。

父親は医師であつた。個人病院だが、若い医者二人と看護婦四人を置いている、かなりの規模であつた。母親も、健在だった。ところが、昭和二十一年の四月に、父親が自宅の付近で殺されてしまったのである。

なぜ殺されたのか、原因はまったく分からなかった。同じ時刻に若い女の叫び声を聞いたという噂があつただけで、犯人も逮捕されなかった。結局、最近まで父親の死に関する真相は不明だ

った。

しかし、父親の死によって早瀬家が急速に崩壊を始めたことだけは事実だった。弥一が、みずからの左目をナイフで潰してしまった、という事件は、父親が殺されて約一ヶ月後のことだったのである。

ぼくは、弥一の自虐的なこの行為と、彼の父親の無惨な死とを、結びつけて考えないではいけないのだ。弥一は父親の死によって、彼なりの人生観を変えてしまったのではないだろうか。その頃彼の行動が一変してしまったのがそれを証明しているような気がする。

本来ならば、弥一は医大へ進み、父親のあとを継ぐはずだったのである。だが実際はまったく違った方向へ彼の人生が決定づけられたのだった。

弥一が家を飛び出したのは、それから約半年ほどたってからである。その原因については、かつてぼくが弥一と話した時のやりとりで紹介しておこう。

「結局、おふくろのことが気に入らなくて、家を出たんだ」

「お母さんは、君の家にいた若い医師と再婚したんだっけね」

「そうだ。男の方が五つばかり年下だよ」

「当時の、お母さんは、いくつだったんだ？」

「ぼくを二十の時に生んだんだから、あの頃は三十六だったのかな」

「じゃあ、再婚するのは当然じゃないか」

「再婚するのは構わない。しかし、ぼくは我慢出来なかったんだ。あの若い医師とおふくろが妙

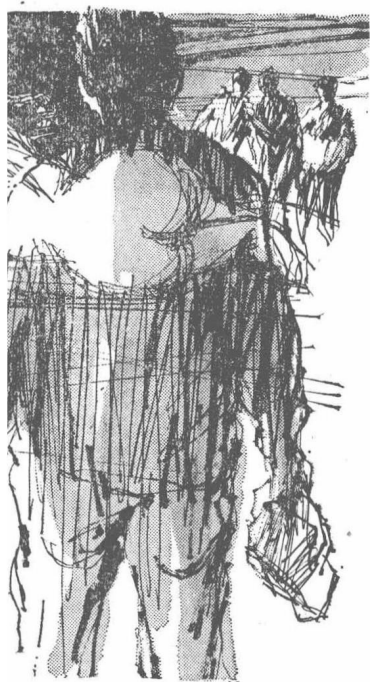
な関係になったのは、おやじが殺されてから、五ヶ月とたたないうちだった。ぼくは、二人がベッドの上にいるのをこの目で見てしまった。その足ですぐ家を飛び出したんだけどね。まあ、おふくろもおやじを忘れるのがちょっと早すぎたんだな」

「お母さんのことを、憎んでいるかい？」

「いや、嫌いでもないし、好きでもないさ」

家を飛び出した弥一は、次の日から異常な人生航路へ小舟を乗り出さなければならなかったのである。以上が、早瀬弥一の生い立ちの断片であった。

早瀬弥一の最初の犯罪



十五歳で家を飛び出した早瀬弥一は、横浜の本牧に住んでいる父親の従兄を頼って行った。中山正二郎というその父親の従兄は小さいながら紡績工場を経営していた。紡績工場とは言っても、終



もなくなった。婦人用の絹の靴下を作り始めようなどと言っていたが、それもまだ実現されていない頃だった。

弥一は、ここでもあまり歓迎されなかった。食糧難の時代であり、正二郎には六人も子供がいたのである。それでも仕方なく、正二郎は弥一を家にいれた。だが、学校へ行かせてくれるほどの面倒は見てもえなかった。弥一は、すぐ近所にある酒屋の店員になった。住み込みではなく、正二郎の家から通ったのである。

ここで、弥一は初恋をしている。いや、初恋とは言えないかも知れない。好きだと思った女はあとにも先にも一人きりいない、と弥一は言っているのだ。つまり、最初にして最後の恋を、この酒屋の店員時代にしたわけである。

その酒屋は屋号を『三河屋』といい、正式な苗字は倉沢であった。夫婦と息子が二人、それに娘が二人という家族構成であった。弥一が恋をしたのは、その末の娘であった。名前を津矢子という。年は、弥一より二つ下であった。

弥一が津矢子に恋心を抱いたのは、三河屋に勤めるようになってから二年半ほどたった頃だったという。弥一はもう、十八になっていた。従って、津矢子は十六だったわけである。

戦直後の当時、仕事らしい仕事はなかった。戦中は軍手と靴下を作っていたが、戦後はその需要

「絶対に、片想いではなかった。その頃の津矢子は、ぼくと結婚することを少女なりに真剣に考えていたんだ」

と、弥一はこと津矢子に關すると、恐ろしく真面目な顔で力説する。彼に言わせると、その頃の津矢子はバンビのようであったそうである。色が小麦色で、くりくりとした黒い目は無邪気に、そして悪戯っぽく大きかったという。小柄で、弱々しい半面、どこことなく健康的な感じがした。と、弥一は津矢子のことを話す時、まるで夢でも見ているかのように遠くを眺める目をするのだった。あるいは、弥一がこのまま三河屋に勤め続けていたら、成人した津矢子と結ばれたかも知れない。しかし、思わぬ悲劇がこの三河屋を訪れたのである。昭和二十五年二月二十一日の夜中、六人組の強盜が三河屋に押し入ったのだった。

当時の神奈川県の新聞には、黒人を交えた六人組の強盜と報じてあるが、その真偽のほどは分からない。目撃者が、一人もいなかったのだ。一人が逮捕され一人が死んで、残りの四人は逃走したまづいに掴まらなかったのだった。逮捕された犯人の一人は、警察へ連行される間に、隠し持っていた青酸化合物を飲んで自殺した。この自殺した男は日本人で十七歳の少年だった。

敵然たる事實は、三河屋の主人が撲殺され、その妻が喉を刺されて、三カ月間の重傷、長男が頭を撲られて一週間の怪我、長女と次女も頭を撲られた上、数人の男たちから暴行を受けて一カ月間の怪我、強奪された金品は一級酒二十本、二級酒五本、現金三万五千円——という三河屋一家の、被害状況であった。

次男は、近くの友達の家で麻雀をやっていたために難を免がれた。

この事件を、最初に知ったのは弥一だったのである。この夜、彼は正二郎の家へ帰っていたが、十二時に外へ出た。これという理由はなかった。

「虫が知らせたのかも知れない。何んとなく三河屋の近くへ行ってみたくなったんだ。津矢子のことになった。いや、どうしても彼女に会いたかったんだ」

弥一は、その時の気持をこう語っている。夜中に出掛けて行っても、津矢子に会えるはずはなかった。だが、弥一は三河屋の近くへ行ってみたいという気持を抑えきれなかった。

弥一は、人通りのない電車通りを歩いた。空には、青白い月があった。二月の夜である。顔が痛くなるほど、夜気は冷たかった。

三河屋のそばまで来て、弥一は奇妙な気配に気づいた。店の前に古自動車が停まっている。そして、店の戸が一枚はずされていた。電気はついていない。

そのうちに、店の中から三つ四つと黒い影が現われた。それぞれ、重そうな箱を抱え込んでいく。黒い影は、それらの箱を次々に車の中へ運び込んだ。

酒だ——と、三河屋の店員である弥一にはすぐ分かった。夜中に、店から酒を運び出すのもおかしい。それに、黒い影は全部で六つだった。泥棒——と、弥一は直感した。彼が駆け出した時四つの人影がすでに車の中におさまり、あたりにエンジンの音が響き始めた。

「待て！」弥一は叫んだ。同時に、車はスタートしていた。二人の人間を置き去りにして、逃走したのである。

置き去りにされた二人は、慌てて左右へ散った。二人を追うことは不可能であった。弥一は、

右の方向へ走って行く男を追った。五十メートルも走らないうちに、弥一は男に追いついた。

「この野郎……！」

弥一は、男の脚に跳びついた。男は、地面に転倒した。弥一は男に馬乗りになって首を締めあげた。

「あの家で、何をした！」

男はジャンパーを着た、二十五、六の青年だった。もの凄いい相で、抵抗する。しかし、口を開こうとはしなかった。

「言え！ 言わないと締め殺すぞ」

弥一も、逆上していた。前後の見境いなくなっていた。彼は全身の力を両手に集めて、男の首を締めた。

「やったんだよ！」

男が、うめきながら口走った。

「やった？」

「親爺をバラしたんだ」

「何んだって！」

「バシタも、死ぬかも知れねえ」

「娘たちは？」

「撲っただけだ」

「本当か？」

「おれは何もなかった」

「ほかの連中が、娘たちをどうかしたんだな」

男は顔をそむけてしまったが、それ以上は聞かなくても津矢子の身にどのようなことが起ったか弥一にも見当がついた。

「畜生！」

弥一は、頭の中がカッと熱くなるのを覚えた。絶望的になり、それに抑えようのない怒りが加わった。彼は、この瞬間、完全に狂ってしまったのかも知れない。弥一は傍らに転がっていたコソクリートの断片に手をのばし、それを振り上げた。

五分後に、弥一は呆然と立ち上がった。頭を割られた男は、もう動こうとしなかった。弥一は、殺人容疑で逮捕された。相手は凶器を持っていなかったのだから、正当防衛は勿論、成り立たなかった。彼は未成年者だったので、家庭裁判所送致となり、改めて刑事処分に相当するといふことで検察庁の管轄へ逆送された。

成年に達していなかったこと、恋人が暴行されたと知り逆上しての犯行だったこと、強盗に対する恐怖感があったことなどの情状が加味されて、懲役五年の判決を受けた。

早瀬弥一の宿命